
幼馴染の彼をオトす為に普通少女が頑張る話

蝶乃 みなと

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幼馴染の彼をオトす為に普通少女が頑張る話

【Nコード】

N0047BA

【作者名】

蝶乃 みなと

【あらすじ】

幼馴染の美紀と真志、美紀は至って普通の女の子だけど真志はかなりの顔の良さ。（皆はこれをイケメンという）美紀が真志と付き合うことを夢みて色々頑張るお話です。でも高校生活には色んなハードルや試練があるので応援してあげてください（・・・）

幼馴染の彼と高校で同じクラスになれるのかドキドキの件（前書き）

新感覚な感じで書いてみました（、・・、）
良かったら読んでみてください
三

幼馴染の彼と高校で同じクラスになれるのかドキドキの件

「美紀^{ミキ}ってさ、なんで太っちゃった訳？」

中学校最後（卒業式）の下校の時に
幼馴染の持田^{モチダ}真志^{シンジ}が爆弾発言。

え、てゆうかレディーに向かつてそんなこと言う人いるの？
この世に存在することすら知らなかったわ！

てゆうか太ってないし！結構これでも痩せてるほうだし！
てゆうかデリカシーない男だな！

まあその後私はダイエットで3キロちょい痩せた。

私、^{ハラダ}原田美紀^{ミキ}は真志とは幼稚園の頃からの幼馴染で

小さい頃から顔が良かった真志（はつきり言えばイケメン君）
に群がる女を駆除するのが

昔から私の仕事だった。

私たちは高校一年生になった。

真志と私は当たり前みたいに同じ高校に入った。

そこらへんが幼馴染の特権。

いつになっても離れないこと。

高校生と言えば恋の発掘現場、恋を発掘しまくれる場所とい
う訳で。

もちろん顔が良い真志は女子生徒の注目の的という訳

真志は空気も読めなければデリカシーもないという男だけど

イルに

そのさっぱりした性格が女の子にはツボらしく、真志のスマイルに
何人もの女がオチていくのを見てきた。

私が真志に群がる女を駆除してきた理由は他でもない。

私が！真志に！惚れているからである。

あわよくば真志と付き合いたい。

私の容姿だと幼馴染という設定がなければ近づくことも触れることさえ

一生叶わない夢だったと思う。

そこには神様と産んでくれたお母様に感謝するが、どうせ神様なら

私と真志をくつつけて下さい、死んだら私が次の神様になってあげるから！

そろそろ高校生になった私たちの話をします。

高校で一番大事なものは『クラス発表』！

んでね、高校のクラスは4クラスまであったわけ。

私が真志と同じクラスになれる確率は低くもないし高くもないという

微妙な確率。

ドキドキしながら見ていると、真志が叫ぶ。

「あ、俺1 - 4だわ」

1 - 4！？

私は急いで1 - 4のクラス名簿を見た。

私の名前は原田だから真志より前のはず。

目を凝らして見てみると、原田、原田・・・あった！

私の目の中には紛れもない『原田』の文字が！
ヤッタ！もう神様ありがとございます、一生このご恩は忘れません。

「真志、私も同じクラ」

「おつ美紀のクラス見つけ、1 - 1じゃん」

・・・はい？

あのあのあのあのすみません
さつき私のクラスが1 - 1だと言いましたか？

私は1 - 1のクラス名簿を見る。

ん！？私の原田美紀という名前が。

じゃあ1 - 4にいた原田は・・・んん！？

原田・・・さとみ？

同じ苗字の原田さん。

見ず知らずのあなたを呪います。

くっそ、こういう間にも真志を狙ってる女子がいるっていうのに。

周りを見渡せば真志を見てキヤツキヤツ騒ぐ女子たちの群れ。
真志はいままでに付き合った女子はいない。

（私の駆除のおかげなのか真志が付き合う気がないだけなのか
わかんないけど）

ああもうなんで同じクラスじゃないの！

神様とかもう信じない絶対信じないあああああもう嫌

「クラス離れちゃったなーでもまあ昼休みに会いに行くから」

「う・・・うん」

真志iiiiiiiiii（泣）

高校生活・・・クラス離れちゃったし今まで以上に警戒しなければ。

女子高生は怖い、きっと怖い、肉食系、絶対野獣、絶対ハイエナ。

入学初日で友達ができるかできないかの件

G
O

仕方なく真志と別れた私は未知の領域となる高校生の教室へ

真志も居ないし鬱鬱鬱鬱

おっとダメだぞ

昼休みには真志が来てくれる！

それまでに何とかしないと。

とりあえず教室で同族を見つけられれば最高なんだけど。

これから一年一人で過ごさなきゃいけなくなるとか嫌だし！

私は少ししかない勇気を振り絞って教室のドアを開けた。

イタ

！！！！

清纯派女子、ビバ純粹女子！

窓際で本を読む超美人なあの子はきっとハイエナなんかじゃないし

男漁りとか合コンとか不純異性なんちゃらとかいうのとは無関係な領域に

凜とたたずむ純粹でマトモ、真面目女子！

私は自分の席を確認する。

えっと・・・あつたあつた、窓際！

あの清纯派女子の後ろだ！

今さらだけど最高にツいてる（＾　＾）！

これならなんとなく仲良くなれるハズ。

私は清純派女子の後ろの席に座ると後ろから肩を叩く。
どんな声でどんな優しい心の持ち主なんだろう！

「何か？」

「えっと、後ろの席の原田美紀。よろしくね」

「私は小島紗羽^{こじま さわ}、こちらこそよろしくね」

キタキタキタキタ

！！！！

この反応は優しくて清潔で純粋な子の反応である。

「よかつたら話さない？」

「いいよ」

「どこ中出身なの？」

「私、ハラ中なの」

「ハラ中って小原中^{こはらちゅう}！？結構遠いところから来たんだね」

「うん、原田さんは？」

「あ、原田さんじゃなくて美紀でいいよ」

「あ、ほんと？じゃあ美紀って呼ばせてもらおうかな。」

私の事も紗羽でいいよ」

「じゃあ紗羽って呼ばせてもらうね。」

私はすぐその新中^{しんちゅう}だよ」

「そうなんだー、あ、もしよかつたらアド交換しない？」

「あ、するする！」

これすごい良い展開じゃない！？

さっそく新しい友達出来たしこれで一年間は絶対安心。

あとの心配は真志だけ。

真志と付き合えれば青春真っ盛り！と感じて良かったのに。

「美紀は彼氏とかいるの？」

ヴツ・・まあこの話題は逃れられないか

「私は・・まあ好きな人はいるけど」

「へえ！誰？同じ高校？」

「ん・・んまあね」

「へー頑張ってるね」

あ、あんま追求してこない？

それはそれで有難い。

無駄に追求してくる人っているよねー

私はそういうの無理派だし。

入学初日に出来た友達の良い人だった。

いまのところそれだけが救い。

幼馴染の彼を猛獣の群れから奪えるか奪えないかの件

私に友達ができたのはいいけど

他の人は仲よくもなれそうもない人達ばかり。

おもつきりケバイ化粧、茶髪金髪あたりまえ

一年生なのに制服は着崩してるしスカート丈短っ
耳やら口やら鼻やらに未知の穴・・・

ゼツタイ仲良くなれない

てゆうか話すことさえ無理無理無理無理無理

んで、昼休み。

「美紀！」

この声は真志！

教室のドア付近でニコニコ笑いながら手を振る真志発見
やっと愛しの真志が来てくれたああああ

だけど一瞬にして真志は女子の群れによって消えていった・

・
・

くっそう邪魔な女どもめ！

真志は私だけのモノ！

真志のところへ向かおうとすると紗羽の声。

「あれ、誰？」

「あ、ああ、あれは1・4の持田真志。」

小さい頃から顔が良くてモテてたの」

「へーかつこいいね、ちよつと話してこようかな」

えっ！？ちよ紗羽！？

やばいやばい紗羽とライバル？になっちゃうとか無理！

「でも真志って女の子と話したりしないから・・・」

「？呼び捨て？」

「あ、ああ・・・真志と私は幼馴染なの」

「へーすごいね、イケメンくんと幼馴染なんだ」

「そういつても小さい頃から一緒だから、すごいとかよく分
かないんだ」

「そうなんだ」

「ちよつと呼ばれてるから行くね」

真志の顔が良い為に！

私の友達の紗羽まで真志の虜になっちゃうかもしれないな
んて！

なんて運が悪いの私よ・・・

「真志！？」

「あ、美紀」

群がる女をかき分けて真志と無事会っつ。

「ちよつとアンタ誰よ？真志君のこと呼び捨てなんて何様！

「？」

近くにいた超美女が叫ぶ。
私のことですか！？

「美紀、いこうぜ」

真志が私の手を握って廊下へ脱出。
てゆうか、手、握っちゃった、よ。

超美女は私たち二人を見て悔しそうに叫んでいた。
ざまあみそらしど！

結局勝つのは一番真志に近い人間、つまり幼馴染の私！

「大丈夫？」

「あ、うん。真志こそ」

「俺は大丈夫だけど」

「てゆうか・・・その、ありがとね。助けてもらっちゃって」

「いや会いに行くって言ったの俺だし。」

「どう？クラスは」

「友達出来たよ、ばっちり」

「マジで！まあ美紀は良い奴だもんな」

この時間がもつと長く続けばいいのに。

なんでクラス離れちゃったんだろ、神様。

どうして私と真志の仲を引き裂こうとするの？

「ね、えねえ真志、帰りひま？」

「おう」

「一緒に帰れない？」

「何言ってるんだよ、俺らずっと一緒に帰ってたじゃん」

心臓がうるさい、

真志は私の事をただの幼馴染として見てる。

だけど私は……

期待しちゃうよ、そんな言葉言われたら。

「ねえ、私たちってさ……」

「ん？」

「……いや、なんでもない」

言ったら壊れる、絶対に。

私と真志だけをつなぐ幼馴染の絆という名の糸が。

幼馴染に恋してる普通少女がハブられるかハブられないかの件

昼休みが終わると私と真志は別れて自分の教室へ戻った。

そんで問題は私。

教室のドアを開けると目の前に厚化粧女子数人。

「原田美紀だよな？あんた真志君の何なの？」

「.:.^?」

「へ？じゃねえええんだよおおお」

[illegible]

この人たちが完全に私を殺そうとしてる！

相手を冷静に数えると5人。

つまり5:1で彼女らは私を殺そうとしているに違いない！

「私と真志は、ただの・・・幼馴染ですからして」

「幼馴染？」

「小さい頃から遊んでいた仲という意味でして」

「それは分かってんだよおおおおおお」

キヤ

怖い怖い！

「てことは真志君とお前はただのトモダチってわけな」

「え．．．ええまあそうですね」

ら

「それはそれで良かったわ。もしもお前が彼女ですとか言った
まじ半殺しにしてたから（笑）」

（笑）！？

（笑）ってなに！？

「でさ、真志君にもう近づかないでくれる？」

・・・！？

「私たちとか中学の頃から真志君に憧れてたの。
真志君はみんなのモノ、それが守れない奴は排除しなきゃい
けなくなるからあ」

排除・・・つまりハブってことね。

初日から運ないなあ、こんな奴らと同じクラスになるなんて

「オイ、何とか言えよ」

絶対嫌。殴られてもハブされても真志だけには、
真志だけは私とずっと仲の良い幼馴染でいてほしい。

「守れない」

「あ？」

「そんな約束出来ない守れない無理絶対不可能！
そもそも真志はみんなのモノって言うけどいつから真志はみ
んなのモノに

なったのよ！？真志は真志だしそんな勝手なルールなんか守

れない！

いつから真志はモノになったのよ！？」

言ってやった。言ってやった。

同時に後悔。後悔後悔後悔後悔後悔・・・鬱鬱鬱鬱鬱鬱・・・
ぜったいハブ、ぜったいイジメ、ぜったい転校させられる
るるる

「何やってんの？」

「しつ真志君」

真志？

厚化粧女たちが叫ぶ。

私が後ろを振り返ると真志。

「俺が誰のものだって？」

「真志君、これは違」

「何が違うんだよ？俺はお前らのもんになったつもりはねえ
なるつもりもねえ、分かったら美紀には二度と近づくんじゃ
ねえぞ」

「ごっごめ、・・・なさい！」

厚化粧女は真志の横を走ってすり抜けて出て行った。

真志の顔、怖い、な あ

本気で怒ってくれてるの？

ねえ真志、どうして私にそんな優しくしてくれるの？
守ってくれるの？真志は、私の事どう思ってるの？

「また何かやられたら言えよ、すぐ助けるから」
「うん」

「俺これ届けに来ただけなんだけど」

「あ、私のピン」

「これないと前髪とめられねえんだろ」

「ごめんごめん」

「美紀ってほんと世話焼けるよな、気をつけるよ」

真志はピンを私に渡すと手を振って出て行った。
ピン、忘れてたか。

幼馴染の彼が噂をどう思ってるのか聞きたいけど聞けない件（前書き）

この話はすごく短くなってしまいました汗

次回からは春をすっ飛んで夏編になります笑

ストーリーがグングン進んでいきそろそろ終わりますw
良かったら最後までよろしくお願いします

幼馴染の彼が噂をどう思ってるのか聞きたいけど聞けない件

あのあとは特に何事もないまま終わった。

でもあの大騒ぎ（どっちかつーと小騒ぎだけど）は
クラスの目の前でやったのでクラスメイトはもちろん
ほかのクラスメイトも見ていたので噂話がうるちよろして
いた。

特に、真志ファンに。

帰りのHRホームルームが終わると真志が迎えに来ていた。

「待っててくれたの？」

「もちろん」

二人で学校内を歩くと色々な噂が流れているようで全部耳
に入ってきた。

私と真志が付き合ってるとか（それはそれで私にはありが
たい）が主だけど。

真志、どう思ってるんだろ、この噂。

そんなこと、死んでも聞けないけどね笑

幼馴染の彼が噂をどう思ってるのか聞きたいけど聞けない件（後書き）

前書きでも書きましたが、次回からは春をすっ飛んで
夏編へと突入します＊

しかも夏休みがすぐ来るので驚かないでね）

幼馴染の彼をお祭りに誘えるかの件（前書き）

前回で言ったとおり夏休み直前のお話です。

夏の学校風景はほとんどかかれなまま夏休みに持ってかれます笑

幼馴染の彼をお祭りに誘えるかの件

あつい、あつい、あついぞ日本！

夏って本当憂鬱だよねw

プールに飛び込みたいわあ

突然ですが夏と言えば、そう！

お祭り・花火大会と言った大イベント（．．．）

乙女にとっての恋の戦争時代

つまり私にとっても戦争時代だということなのですぬ

今度こそ（？）真志と二人きりでいいムードになりたい（

願望）

さっさと夏休みに入ってほしいのに。

夏だからなの？

夏だからこんなに時が過ぎるのが遅いのおおおお？

かつん。

イタ…い？

目をぱっちり開けると目の前で辞書をもった国語の先生が怒ってらっしゃるわ。

あ、チヨーク投げつけられたわけね

てゆうか前から疑問だったんだけどチョーク投げるのはいいの？

ルール違反じゃないの？頭にぶつかんなかったら絶対危険だもん

コントロールがない先生がチョーク投げたら絶対顔面に当たるよね？

「原田、どうしたボーっとして？」

「う…え？」

ズシッ

「いつ…たあああああ」

「目が覚めただろ？」

国語の先生は笑っていった。

これは、体罰だ。

辞書を人の頭にぶつけるという名の体罰だ。

「教科書は人の頭を叩くためにあるものじゃなくて

人の頭を良くするためにあるんだけど！」

「おっ上手い事言っね笑」

こ…んのクソ野郎…！

心を入れ替えて授業を受けようにもなかなか頭に入らない。たぶん耳には入ってる。うん、耳には入ってるんだけどね、なかなか脳内には入らないんだなーこれが

私はシャープペンで机に夏休みまでの日にちを書いた。

あと2日：この微妙な感じが嫌だわあ
早く夏休みになんねえかなー

「美紀ったら怒られてたねー笑
辞書痛くなかった？」

紗羽がニコニコしながら言う。

「めっちゃ痛いよ泣」
「そろそろ夏休みだねー」

めっちゃ話ズレた！

「確かにね
夏休みっていったらイベント盛りだくさんだよな」
「お祭りとか？」
「うんうん好きな人誘って二人きりで…キヤ　！…なん
てね笑」

「すきな…人ねえ…」
「うんうん」
「美紀は好きな人いるんでしょ？誘うの？」
「う…誘うだけ誘ってみるかなー」
「もしかしたらほかの人と約束してるかもだし」
「そっか…じゃあ私もそうしようかな」
「え？どうゆうこと？」
「私も気になる人いるんだあ笑」
「まーじーでー！」
「教えないけどね笑」

「お互い頑張ろうね」

真志とお祭り…考えただけでも素敵！
絶対素敵な夜になるし！

今日の帰りでも聞いてみようかな…。

「きりーつ れい さよーならー」

このあいさつ誰もやってねえんだからやる必要ねえだろw
てゆうか私日直だあ
日誌書いてさっさと終わらせちゃおうと

「ふう」

終わった終わった終わったー

さて真志と帰ろうと

教室のドア付近にたまってる男子軍団を切り抜けて人ごみの廊下に出ると

ありや？真志が居ないや

真志のクラスのほうが遅いのかな？

真志のクラスに行ってみると誰も居ないし
あれれ？どこ行ったんだろ？

真志を探して下駄箱まで来てしまった汗
帰っちゃうよー

って何か近くで聞こえる？この声…紗羽？

あ、そういえばこの下駄箱つて下駄箱の隣の小窓から、
裏がすぐ裏庭だから裏庭の声の下駄箱から声ダダ漏れなん
だよー

裏庭で告白とかしてもみんなにまるぎこえだから可哀想な
んだよねw

『ねえ一緒に祭り行ってくれない？』

…！？紗羽がお祭り行かない？つて…てことは一緒にいる
人が紗羽の好きな人？

裏庭につながっている窓があるとは言え、めっちゃ小さい
から顔を覗くことは出来ない

『ごめん、俺、君のことよく知らないし、それに

もしかしたら一緒に行く人がいるかもしれないから』

『それって、どういうこと？』

『まだ約束はしてないってことだよ

そーゆうことだから、じゃあね』

やばっ、来ちゃう汗

急いで下駄箱から逃げて階段を上ってからまた下がった。
上から来たふりして、何も知りませんよーアピールしながら

らも

紗羽の好きな人バッチリ目撃してやる！

てゆうか紗羽も紗羽で教えてくれればいいのにー

そしたら応援するのにさ！

てゆうかさっきの男の声なんか聞いたことあるんだよねー
上手く聞き取れなかったからよく分かんなかったけど

んで、冷静を保って階段を下りるとバツタリ紗羽と対面。

「あれ？紗羽じゃんどうしたの？もう帰るん？」

「あ、うんーそうなの」

「そっか、じゃあねー」

「バイバイ」

あれ？紗羽ひとり？

おかしいなーどうしてだろ…

「紗羽？」

ん、この声…って

「真志？」

「紗羽かーゴメンゴメンちょっと用があって」

「あ、ここにいたの？」

「おうー、ちよっと鞆とってくるわ」

真志が階段を上っていくのを見て確信した。

紗羽、真志に、惚れたな？

紗羽が呼び出したのは真志。

気になる人っていうのが真志ならお祭りに誘うのも分かる
紗羽は私が真志の事を好きって知らないんだから好きにな

っちゃうのも

しょうがない事だ、未然に防げなかった私が悪いのだ。

てゆうか、えー…

まさかの唯一の友達がライバルになんの？

もう神様ってほんとイジワルだよね笑

もういつそ清々しく笑うしかないのだ。

階段を下りる足音が聞こえて、真志が現れた。

「じゃ、かえろっか」

「うん」

そういえば、お祭り…

さつき真志、一緒に行く人がいるかもしれないって言ってた

けど

誰の事だろう？友達？まさか好きな人？

「ねえ美紀」

「ん？」

「祭り、誰と行くん？」

「あ…あう、あ」

なんかいざとなったら言いにくい！

これで断られたらなんか恥ずかしいし汗汗汗

「もしも約束してないんだったら俺と行くつよ」

「え」

「うん？」

「いいの？」

「なにが」

「えっと、その、一緒に…お祭り行っても」

「だから誘ってんだけど笑」

「そ、か」

なんかすごく恥ずかしい、顔、赤くないかな…

「じゃあ、行きたい」

「じゃ決まりな、てゆうか浴衣着てこいよー浴衣」

「浴衣あ？無理無理！着方すらわかんないし

てゆうか浴衣って私に似合う服（？）じゃないから笑」

「そうかなー俺ぜってえ似合うと思うんだけどー」

真志が笑う

そんなこと言われたら…

そんなこと言われたら浴衣着るしかないじゃないか！

「んじゃ、じゃあな」

「ばいばいっ」

家に帰って速攻お母さんに叫んだ。

「浴衣出して！」

幼馴染の彼をお祭りに誘えるかの件（後書き）

次回は早速夏休みに入ってしまうと思います）、・、（

浴衣が着れるようになるのかならないのかの件

うああああああああああああああああああ

いきなり叫んでしまつて申し訳ありません

実はお母たまに浴衣を出してもらつただけど

『着方が分かんないwww』

お母さんに聞いてもわかんないと言われるし

いちいち着物屋さんのところに行つてやるのもなんか嫌

だし

じゃあ着るなつて話だけどさ。

前回の話を見た方は分かりますが

幼馴染の真志にお祭りに誘われてしまったのです！

（詳しくは前回を見てね ミ ばちこーん）

これは重大だよ、つーか緊急事態なんだよね！

お祭りまでに浴衣を一人で着れるようにならないと

真志とのお祭りの日に浴衣着ていけないからさあ泣

で、待ちに待つた二日後〃夏休みに入る日

放課後に体育館で夏休みにむけての課題？注意？とかを
校長先生がしゃべってます。

校長先生って話長いよね笑

まったく耳に入ってないからね

今はもう真志との妄想wwしか頭がないも ん

いつの間にか話が終わっていて、みんなが帰っていく。
私も帰ろう、帰ろう！

いつもどおり真志と帰ろうとする…んだけどまた真志が居ないのだ。

また！？

真志らしき背中を発見…んんんんんんん？
隣に…紗、羽…

そういえば紗羽ってば真志の事好きになっちゃってるんだよね…
しょうがないしょうがない、ネガティブになるな、私よ！

とりあえず追跡。

ついていくと、またあの裏庭に。
なので下駄箱で盗聴(?)を開始

『ねえ、お祭り本当にだめ？』

『うん、もう約束しちゃったから』

『その約束しちゃった人って…誰？好きな人？』

『それ言ったらどうすんの？』

『別にどうもしないけど、とりあえず知っておこうかなって。そしたら私も諦めるし、メールも、もうしないから』

…メール！？

よね

嘘でしょ？紗羽と真志がメアド交換してたなんて。
そんなのいい関係になってたの？

でも昨日は真志が紗羽のこと『あんまり知らない』って
言ってたから…紗羽がただアピールしてるだけってことだ

『で、誰なの？好きな人なんでしょ？』

『…』

『まさか、美紀とか？』

『なんで美紀のこと』

『あ、図星？美紀とはお友達なの。』

美紀とは幼馴染なんでしょ？てことは美紀と行くんだ？
美紀のこと、好きなの？』

『そんなんじゃないよ、だって幼馴染だぜ』

ただの友達だろ、勘違いすんなよ』

『へえ、てことは私はあきらめないからね』

『…好きにすれば』

…

そ　　ん　　な　　ん　　じ　　ゃ　　な　　い　　？

勘　　違　　い　　す　　ん　　な　　？

好　　き　　に　　す　　れ　　ば　　？

頭が真っ白になって何も考えられないみたいに、
みんなの声のざわざわとかも聞こえないくらいに、
それぐらい真志の言葉にショックを受けてる。

…なんで私こんなにショック受けてるの？

わかってたはずじゃん、真志は私の事好きじゃないって。どうせ私の思いは一方通行だって。

…ぜったい、かなわない…恋だって…

それから後のことはあんまり覚えていない。

気づいたら家に帰ってベッドにダイブしていた。

たぶん真志とは一緒に帰ってないんだと思う。

私があんなにショックを受けたのは、

わかってたはずなのにあんなに悲しくなったのは、

私の考えじゃなくて、真志の考えを聞いたから。

私はぶっちゃけ真志の友達以上恋人未満、どっちかってと恋人寄りの方だと思っていたからなのだ。

でも真志は違った。

友達以上恋人未満で例えたなら、真志は私の事を

友達寄りの方だということだ。

私と紗羽だったら、紗羽の方が恋人よりだということだ。

私が特別な人だと思っていた人は、ただのお友達だったと
いうこと。

お祭りに誘われたから、浴衣似合っつて言われたから。

それは友達として誘っただけ。言っただけ。

勘違いしていたのは、私だけだったようです

鞆の中でメール受信の点滅をする携帯に気づかないまま

夏休み、突入です

幼馴染の彼とのお祭りに行く約束を白紙にするかどうかの件

夏休み初日の朝はお母さんの声で起きました。

「美紀、お母さんのお友達に浴衣着せられる人が居るんだけどどうする？美紀浴衣着たいんでしょ？」

私は布団に包まっただま言った。

「あああ…浴衣ね…もういいの、浴衣は」

「はあ？どうしたのよ前は着たい着たいってうるさかったのに」

「うるさくて申し訳ありませんでしたね！」

真志とのお祭りは驚くほど行く気になれなかった。

好きな人という時間こそ、至福のときだと言った偉人は誰だっけ。

てゆうかむしろ、真志には今会いたくない。

「あっそう、じゃあまた着たくなったら言ってあげるから」

「そんな日一生絶対永遠に来ないから安心してください」

お母さんは笑って出て行った。

たった前までは、浴衣が着たくてしょうがなくて

真志とお祭り行きたくしてしよがなかったのに。

私は布団から出ると携帯を探しまくる。

あれ？どつかやっちゃったっけか？

あ、そうだ、昨日鞆にいったままだったんだ。

鞆から携帯を取り出すと点滅ランプが目に入る。

点滅？誰かからメールか電話だ。

携帯を開くと受信メールが５件来ていた。

FROM 真志

どこに居るんだよ

今俺体育館前

FROM 真志

おい

先帰っちゃうよ？

FROM 真志

もしかして先

帰っちゃった？

FROM 真志

返事来ないから
わかんないけど
先帰っちゃってる
っぽいので俺も
帰るわ

FROM 真志

今家着いたけど
今美紀家？
置いてってたら
ほんとゴメン

そういえば
祭りのことだけど
時間とか決まった
らメールして

ごめんね、真志
このメールに返事、出来ない。

今はもうお祭りなんて来なければいいと思ってる。
ごめんなさい、真志。

あつというまに夏休みは過ぎていく。
んで、祭りの日も近づいていく。
気づけばあと三日後だった。
そろそろメールの返事をしなきゃいけない。

私を責めたてるかのように真志からメールが届く。

FROM 真志

祭り、何時にする

真志って本当に文章短いんだよなあ
なんて、返せばいいんだろう。

FROM 美紀

遅れてごめんね汗
時間は午後の6時で

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0047ba/>

幼馴染の彼をオトす為に普通少女が頑張る話

2012年1月10日18時49分発行